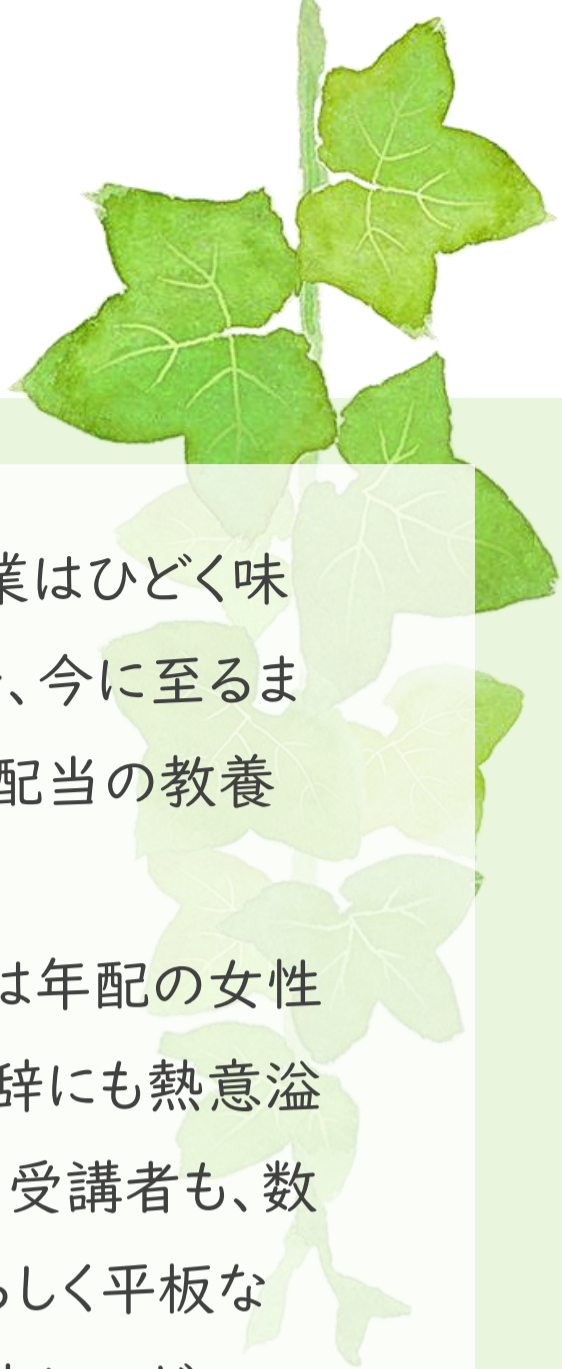


法学部

教授 前川 亨



数十年前、大学に入学したばかりの私には、大学の授業はひどく味気ないものに思われた。一年次の授業の中で、殆ど唯一、今に至るまで強い印象を残している「忘れ得ぬ授業」は、人文分野配当の教養科目「宗教学」だった。

「宗教学」は金曜日の五時間目に置かれていた。担当は年配の女性の教師だった。いかにもやる気なさそうな語り口で、お世辞にも熱意溢れる講義とは言えなかった。そのせいか、最初は多かった受講者も、数回経つと20数名程度に減ってしまったが、私には、おそろしく平板な教師の口調とそこで語られているおそろしく生動的な内容とのギャップそれ自体が面白かった。その授業はエリアーデの『永遠回帰の神話』を基調とするものだった。

当時の私は、宗教現象学も宗教人類学も民俗学も知らなかった。エリアーデという名前すら未知だった。むしろそうであったからなのかも知れないのだが、樹木や石が「聖なるもの」として顕現する過程、「原初へと無限に回帰し続ける時間」の観念、またその回帰が実現する瞬間(「大年」)に表れるオルギー(狂騒)や「さかさま」現象……等々、本書に述べられあてている事象はどれもゾクゾクするほど新鮮に思われた。私は二年次からの専門課程では思想や宗教を専攻することに決めた。

五時間目の授業時間、秋冬ともなれば窓の外は漆黒の闇である。そうした夜のしじまの中で聴講した『永遠回帰の神話』の静かな講義を、私は忘れることが出来ない。

ミルチャ・エリアーデ(1963)『永遠回帰の神話——祖型と反復』(堀一郎訳)未来社

永遠回帰の神話

—祖型と反復—

エリアーデ著 堀一郎訳



未来社刊

本
本

館: K/201/E46 110569951
館: 162/E46 102307261



読書のスルメ2020

